教育実践研究　第27集（2017）　157－162

［外国語］

語順の違いなど文構造への気付きを促す補助教材（Hi, friends! Plus）を使用した授業の効果

－次期学習指導要領における教科化を見据えて－

矢嶋　隆之*

1　研究の背景

平成32年度から，高学年では英語が教科化され，中学年では外国語活動が必修化される予定である。また，平成30年度以降先行実施を行う小学校に「新たな教材」の配布が予定されている。文部科学省は，次期学習指導要領の改訂に向けて補助教材（Hi, friends! Plus）を作成した。平成27年度から平成28年度までの２年間を通じて研究開発学校等において試行的に活用しながら，効果を検証するとしている。この補助教材は，身近なことについて基本的な表現によって「聞く」「話す」ことなどに加えて，「読む」「書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養うことができるように，作成されたものである。映像や音声を活用し，①アルファベット文字の認識，②日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き，③語順の違いなど文構造への気付き等に関する指導に必要な教材であるとされている。

現在，研究開発校等で同補助教材を使っての実践がされている段階であり，英語教育強化地域拠点事業の研究開発学校等における進捗状況や課題が報告され始めている（文部科学省，2016b）。詳しい効果については，今後検証されるものと思われる。現在多くの学校が使用している教材（Hi, friends! ）でも，上述①，②については，関連する内容が扱われているが，上述③の語順や文構造への気付きについては，関連する内容がほとんど無い。語順や文構造については，現在，中学校で学習している内容であり，それを小学校で扱うことが適切なのかなどを検討する必要があると考える。小学校に英語が導入される際「英語嫌い」を生み出さないことが基本理念とされていた（文部科学省，2004）。教科化に伴い，中学校で扱われていた内容が小学校で扱われる際には，十分な検討をした上で，基本理念にあるように「英語嫌い」を生み出さないように配慮する必要がある。

文部科学省（2014）は，中学校１年生の外国語活動に対する意識で「小学校の外国語活動でもっと学習しておきたかったこと」として「英単語を書くこと」83.7％，「英語の文を書くこと」80.9％，「英単語を読むこと」80.1％，「英語の文を読むこと」79.8％という結果を報告している。この結果を受けて，中学校の学習への円滑な接続を考えることが必要であるとしている。しかし，この調査結果は，小学校外国語活動で単にあまり実施していなかったために，「しておきたかった」という回答の割合が高かった可能性もあり，これだけで小学校で扱う内容として適しているかを判断することは難しいと考えられる。そこで，補助教材の内容が，児童の意欲面にどのような影響を与えるのかを検証し，その上で効果的な指導方法を研究することには意義があると考えられる。本研究では，補助教材の中で③語順の違いなど文構造への気付き等に関する内容に焦点を当て，児童の学習意欲にどのような影響を与えるのかを検証する。

文部科学省は，現行の学習指導要領に沿って外国語活動を実施している学校がこの補助教材を活用する場合には，学習指導要領に記載されている外国語活動の目標に向けて十分指導が行われていることを前提とし，「補助教材のポイント」や補助教材の性質，ならびに「教材の概要」を十分踏まえた上で活用するようにすることとしている。この点に十分留意した上で研究を進める。

2　研究の目的

次期学習指導要領の改訂に向けて作成された補助教材（Hi, friends! Plus）の中で，語順の違いなどの文構造への気付きに関する教材が児童の学習意欲に与える効果を明らかにする。

＊ 柏崎市立比角小学校

3　研究の方法

(1)　**参加者**：小学校６年生児童　１クラス31名

(2)　**実施期間**：2016年９月

(3)　**測定方法**

①Keller（1992）に基づく６項目に，松崎・北條（2006）による１項目を加えたARCS動機づけモデルによるアンケート。ARCS動機づけの項目は，外国語学習の動機づけの要素であるAttention（注意），Relevance（関連），Confidence（自信），Satisfaction（満足）のそれぞれの４側面に，意欲を加えた５つの側面から構成されている。

②語順の気付きに関するアンケート（１項目）

③事前・事後アンケート（全８項目）

(4)　**分析方法**：直接確率計算（母比率不等）及びχ^2検定，分散分析

4　単元の開発と実践

(1)　**単元名**　「A Letter to.... 」

(2)　**使用教材**　デジタル教材『Hi, friends! Plus』

(3)　**単元のねらい**

〇英語と日本語の語順の違いに気付き，言葉の違いに興味をもつ〈言語や文化に対する気付き〉

(4)　**展開の構想**

文部科学省（2016a）は，補助教材は，音声による活動が十分行われることを前提に，１単位時間の授業の中で，５～10分程度，補助的に活用することを想定して作成している。しかし，本研究で扱う「語順への気付き」の内容については，複数回に分けて短時間で行うよりは，一単元を設定し一回に45分などのある程度の時間をかけて，系統的に連続して扱うことが効果的としている。

そこで，まず，デジタル教材『Hi, friends! Plus』に収録されている絵本“A Letter to.... ”について読み聞かせや様々な活動を通して，絵本の内容等について児童が十分に理解し，絵本で扱っている語彙や表現を何度も聞いたり言ったりして十分に慣れ親しむ活動を行う。その上で，「語順への気付き」のワークシートを活用する。本単元で使用した３枚のワークシートは，デジタル教材『Hi, friends! Plus』のワークシートword版である。児童が絵を選択する際にどちらの絵なのかが分かりやすいように，もとのワークシートにA，Bの表示を加えたり，登場する人物の名前が分かるように絵の下にその人物の名前を付け加えたりして使用した（図１，図２，図３）。

(5)　**指導計画**

時	ねらい	内容
1	・『A Letter to.... 』に登場する動物の英語に慣れる。	①事前テスト ②『A Letter to.... 』の１ページ目の絵から動物探し（グループ対抗）。 ③『A Letter to.... 』に関する記憶クイズ（個人） ④『A Letter to.... 』に出てきた動物を英語で書いてみる。
2	・『A Letter to.... 』に繰り返し出てくるフレーズに慣れる。 “The ○○ is chasing the ○○.”の表す状況が分かる。	①『A Letter to.... 』を聞いて聞き取れた英語をメモしてみる。 （動物の名前。動物の名前以外にも何度も出てくる言葉） ②『A letter to.... 』に関する記憶クイズ（動物が出てくる順番） ③語順への気付きワークシート①
3	・外国語と日本語の語順の違いに気付く。	①語順への気付きワークシート② ②英語と日本語の語順を比べる。 ③カードゲーム「神経衰弱」
4	・外国語と日本語の語順の違いを意識しながら，『A Letter to.... 』に出てくるフレーズを声に出そうとする。	①日本語と英語の語順の違いを確認 ②語順への気付きワークシート③ ③カードゲーム「神経衰弱」 ④班で読み聞かせ練習
5	・外国語と日本語の語順の違いを意識しながら，絵本『A Letter to.... 』を読んでみようとする。	①学級の前での読み聞かせ ②事後テスト

(6) 授業の様子

第１時は，『A Letter to.... 』の１ページ目の絵からグループ対抗（３～４人グループが８つ）で動物探しを行った。この絵の中には，物語に登場する動物以外にも多くの動物がおり，児童が興味をもって探すことができ，グループ対抗にすることでさらに意欲的に取り組めると考えた。動物を見付けることができたら１ポイント獲得し，その動物を英語で言うことができたらさらに１ポイント獲得できるというルールにした。児童は自分たちが英語で言える動物を積極的に探していた。次にデジタル教材を使って絵本『A Letter to.... 』の読み聞かせを行った。読み聞かせを始める前に，これから出てくる動物を前の活動で選んでいたらボーナスポイントとして５ポイント加算されることを伝えた。このことにより児童は，集中して読み聞かせを聞いていた。次に，記憶力クイズを行った。「何匹の動物が登場し，何の動物が出てきたか」をメモをせずに覚え，読み聞かせを聞いたあとにワークシートに答えを書いた。最後に，登場した動物を英語で書いてみるという活動を行った。児童は，黒板に掲示した動物絵カードについている英語を見ながら書いていた。

第２時は，『A Letter to.... 』の読み聞かせを聞いて，聞き取れた英語をメモする活動を行った。絵本に慣れさせるために毎回同じように読み聞かせをするだけでは，児童の興味は薄れていくことが予想された。そこで，絵を出さずにプロジェクターから音声のみが聞こえるようにすることで，児童にとって少し難易度が増し，英語を聞こうとする意欲が高まると考えた。このように工夫することで児童は，集中して聞くことができ，登場する動物の名前をよく聞き取ることができていた。動物の名前以外に児童が聞き取ることができた英語は，“yes”，“good idea”，“tomorrow”，“soccer”，“hungry”，“Me,too. ”，“home”，“chasing”であった。次に記憶力クイズを行った。10匹の動物がどのような順番で出てくるかをメモをせずに記憶した。記憶する際には，デジタル教材による音声ではなく挿絵を見せながら教師がゆっくりと繰り返し音声を聞かせた。“The pig is chasing the elephant. ”など教師の言う英語を児童は自然に繰り返して言っていた。次にワークシートを使用した。『Hi, friends! Plus』の「ワークシート⑪－1　語順への気付き」（図１）を使用した。このワークシートは，４問のクイズから構成されており，２枚の絵から担任が言う英語に合う方の絵を選んだ。

第３時は，「ワークシート⑪－2　語順への気付き」（図２）を使用した。子どもが友達を追いかけている絵が４つあり，その様子を英語で言ってみた。その他に「大きなかぶ」の絵がある。「引っ張っている」を英語で“is pulling”であることを確認した上で，４枚の絵の状況を学級全員で英語で言ってみた。児童が使用する英語表現を多くし過ぎないために「おじいさん」「おばあさん」「娘」「かぶ」は日本語のまま読むことにした。「The cat is pulling the dog. The dog is pulling お姉さん．お姉さん is pulling おばあさん.」のように表現した。次に図４のように英語と日本語の文を示し，日本語と英語の違いで気付くことはないかと児童に尋ねた。語順が意識できるように絵カードを使用した。児童からは，「『～を』の言葉の位置が日本語と英語では違う。」「英語は，『～する』の言葉が真ん中に来る。前に習った“I like～.”も同じ順番だ。」などの意見が出された。最後に，カードを使って神経衰弱ゲームをした。図５のようなカードを作成し，めくる際にそのカードの状況を必ず言うというルールで行った。児童は，カードゲームを楽しみながらも，進んで英語でも言おうとしていた。

第４時は，「ワークシート⑪－3　語順への気付き」（図３）を使用した。このワークシートは，１枚目と２枚目のワークシートとは違い，英語の文が絵と一緒に書かれている。第３時に日本語と英語の語順について学習していたこともあり，児童は，絵に合う英語の文を選ぶことができていた。神経衰弱ゲームで児童が英語を言ってみる時には，図５のようにカードに“is chasing”という英語だけが書かれていたため，“the pig”などの“the”が抜け落ちている児童が多かった。しかし，図６の左側にある練習用絵本を読む際には，挿絵のところに英文が書かれていたためか“the pig”，“the elephant”などのように“the”を付けて読んでいたため，文字を手掛かりにして読んでいることが推察された。“The”の読み方の違いについては，第４時では触れなかった。第４時と第５時に使用した練習用と発表用の絵本は，『A Letter to.... 』を短くしたものである。“The pig is chasing the elephant. ”から始まり，動物を表す英語の頭文字を合わせてできるメッセージ“world peace”で終わるようにした。児童が語順について学んだ“The ○○ is chasing the ○○. ”の文と絵本の仕掛けであるメッセージのみの英語を使用することで英語を苦手とする児童でも安心して取り組めるように配慮した。

第５時は，図６の右側にある大きな絵本を使用して学級の前で読み聞かせの発表をした。児童から「グループやペアで発表したい」という希望が出たため，グループ，ペア，個人のいずれかを選んで発表することにした。発表は全員ではなく，挑戦してみたい人がすることにした。学級の約３分の１の児童が発表を希望した。発表の仕方は，児童に任せ

たため，４人で声を揃えて言うグループもあれば，分担して台詞を言うグループもあった。中には，読み聞かせをする児童が教師役になり，聞いている児童に台詞を繰り返すように促すなど工夫しながら読み聞かせをするグループもあった。読み聞かせの発表のあとに，“the”は，次に来る単語によって読み方が変わることも簡単に伝えた。

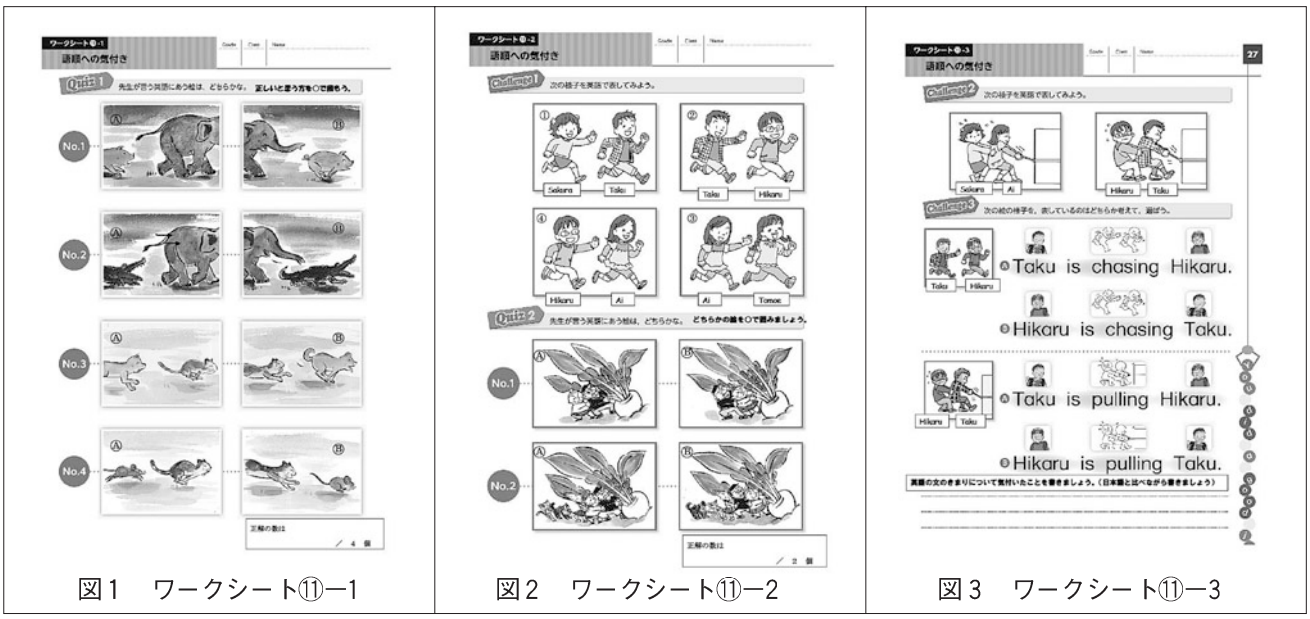

図１　ワークシート⑪―1　　図２　ワークシート⑪―2　　図３　ワークシート⑪―3

（文部科学省，デジタル教材『Hi, friends! Plus』，2015）

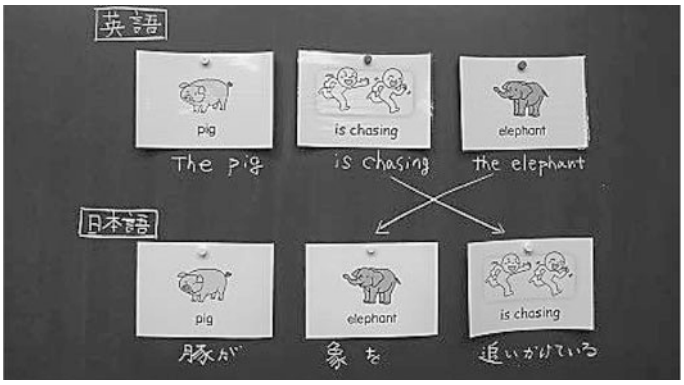

図４　英語と日本語の語順の違い

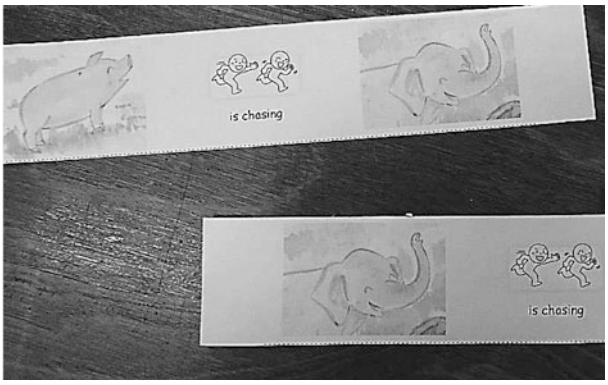

図５　神経衰弱用のカード

図６　練習用絵本と発表用絵本

５　研究の結果と考察

(1)　実践に対する児童の評価の結果

本実践についての学習者の評価を得るため，活動後にARCS動機づけモデルによる７項目のアンケートを実施した。各項目は「５：はい，４：少しはい，３：どちらでもない，２：少しいいえ，１：いいえ」の５件法である。表１より，各項目の平均は3.87～4.42と高い得点であり，児童は，本研究の授業に対して，「わくわくして，おもしろく，やりがいがあって，チャレンジしてみたい内容で，自信がついて，満足し，もっとやってみたい」と感じていたようである。さらに児童の意識をより明確化するため，５段階尺度を「肯定的」「中立・否定的」の２段階位尺度に変換して再集計した上で，母比率不当（2：3）の直接確率計算をした（表１）。その結果，どの項目も１％水準で，「肯定的」な回答が「中立・否定的」な回答を有意に上回った。

表１　ARCS動機づけモデルによる７項目のアンケート結果（*N*=31）

項目	*M*	*SD*	肯定	中立・否定	*p*
わくわく	4.13	1.10	23	8	**
おもしろい	4.42	1.07	27	4	**
やりがい	4.19	0.93	25	6	**
チャレンジ	3.97	0.93	22	9	**
自信	3.87	0.94	22	9	**
満足	4.13	0.94	24	7	**
もっと	4.19	1.15	23	8	**

$^{**}p<.01$

また，授業後に「日本語と英語では，言葉の順番が違うことについておもしろいと思うか」についてアンケートを行った（表２）。肯定，中立，否定的な回答の度数に偏りがあるかをより詳しく見るためにχ^2検定と多重比較を行った。その結果，肯定，中立，否定的な回答の度数の偏りは有意であった（$\chi^2(2)=14.57$，$p<.01$）。ライアンの名義水準による多重比較の結果，「肯定＞中立＝否定」であり，児童は言葉の順番が違うことについておもしろいと感じていたことが示された。

表２　語順への気付きに関するアンケート結果（*N*=31）

M	*SD*	肯定	中立	否定
4.06	1.19	22	6	3

さらに，本学習プログラムの実施前と実施後で外国語活動や英語に対する児童の興味や関心がどの程度変容したのかを検討するために，全８項目のアンケート回答結果を集計し，各項目の平均（*M*）と標準偏差（*SD*）求め，分散分析を行った。その結果を表３に示す。分散分析の結果，項目１「外国語活動は好きですか」（$F(1,30)=9.35$，$p<.01$）項目６「日本語と外国語のちがいについて，『おもしろいな』と思うことはありましたか」（$F(1,30)=5.94$，$p<.05$）において平均が有意に向上していた。項目２「英語を聞くのは好きですか」（$F(1,30)=4.15$，$p<.10$），項目３「英語を話すのは好きですか」（$F(1,30)=3.54$，$p<.10$），項目５「英語を読むのは好きですか」（$F(1,30)=3.55$，$p<.10$）において平均が向上している傾向が見られた。項目４，項目７，項目８については，有意差は見られなかった。

表３　外国語活動や英語への興味・関心に関する８項目の平均（*M*）と標準偏差（*SD*）と分散分析の結果（*N*=31）

	項目内容	事前		事後		分散分析の結果		比較
		M	*SD*	*M*	*SD*	$F(1,30)$	*p*	事前　事後
1	外国語活動は好きですか。	3.77	1.21	4.38	.79	9.35	**	＜
2	英語を聞くのは好きですか。	3.19	1.31	3.65	1.06	4.15	†	＜
3	英語を話すのは好きですか。	3.48	1.16	3.84	1.19	3.54	†	＜
4	英語を書くのは好きですか。	3.54	1.29	3.71	1.51	.57	*ns*	≒
5	英語を読むのは好きですか。	3.13	1.50	3.65	1.33	3.55	†	＜
6	日本語と外国語のちがいについて，「おもしろいな」と思うことはありましたか。	3.45	1.50	3.87	1.24	5.94	*	＜
7	日本語と外国語のちがいについて，「不思議だな」と思うことはありましたか。	3.74	1.50	3.90	1.12	.60	*ns*	≒
8	外国のことばと比べてみると，日本語も「おもしろいな」と思うことはありましたか。	2.65	1.45	2.84	1.50	.71	*ns*	≒

ns（有意差なし）†$.05<p<.10$（有意傾向）$^{*}p<.05$　$^{**}p<.01$（有意差あり）

(2)　考察

表２で示したように，語順への気付きに関するアンケート「日本語と英語では，言葉の順番が違うことについておもしろいと思うか」で肯定的な回答が中立，否定的な回答よりも有意に多かったことや，表３で示したように，項目６「日本語と外国語のちがいについて，『おもしろいな』と思うことはありましたか。」について，事前よりも事後の平均が有意に向上していることが分かった。これらのことから，次期学習指導要領の改訂に向けて作成された補助教材の中で，語順の違いなどの文構造への気付きに関する教材が，児童の外国語への興味を深める可能性があると考えられる。

本研究での授業は，文部科学省が述べているように，語順への気付きに関する学習について一単元を設定し一回に45

分という時間をかけて，系統的に連続して扱った。デジタル教材『Hi, friends! Plus』に収録されている絵本“A Letter to.... ”について読み聞かせや様々な活動を通して，絵本の内容等について児童が十分に理解し，絵本で扱っている語彙や表現を何度も聞いたり言ったりして十分に慣れ親しむ活動をした上で，「語順への気付き」のワークシートを活用した。その結果，表１で示したように，ARCS動機づけモデルによる７項目のアンケート結果は，いずれも肯定的な回答が中立・否定的な回答よりも有意に多かった。また，表３に示したように項目１「外国語活動は，好きですか」について事前よりも事後の平均の方が有意に向上していた。これらのことから，語順への気付きに関する学習は，一単元を構成して系統的に扱っていくことで，児童が意欲的に取り組める内容になることが推察される。

６　今後の課題

本実践は，31人の１学級での実践であったため，他の学級でも同じ結果が得られるかどうか検証してみる必要がある。また，本実践のように，絵本に慣れ親しみながら日本語と外国語の語順が違うことに少しずつ気付いていくことに加えて，さらに発展的な課題に取り組ませることで児童がさらに意欲的に学ぶことができる可能性も考えられる。発展的な課題の例としては，絵本に登場する動物を変えて，自分たちで伝えるメッセージを変えることや，自分たちが作成した絵本を発表する相手を工夫することなどが考えられる。

本実践では，絵本に出てくる英語表現に慣れる活動として，第３時と第４時に神経衰弱ゲームを行った。同じルールで行うことで児童がスムーズに活動に入っていくことができた。しかし，児童の様子を見ていると，休み時間に担任から神経衰弱カードを借りて，ババ抜きをして楽しむ姿が見られた。いろいろな活動をして児童が楽しみながら英語表現に慣れていくことができるように，どのような活動が児童にとって適切であるかをさらに検討していく必要がある。

事前・事後アンケートの項目８「外国のことばと比べてみると，日本語も『おもしろいな』と思うことはありましたか」については，事前調査の平均が2.65と全８項目の中で最も低かった。また，事後の平均は2.84であり事前の平均に比べて有意な差は見られなかった。安彦ら（2008）は，小学校外国語活動で体験的に理解を深める対象は，外国語のみでなく，我が国の言語も含めた広い意味の言語を指していると述べている。本実践は，外国語への興味・関心を高めることはできたが，外国語を通して日本語への興味・関心も高めることはできなかった。今後，日本語への興味・関心も高められるような学習プログラムを開発することも課題である。

【引用・参考文献】

安彦忠彦・大城賢・直山木綿子．（2008）．『小学校学習指導要領の解説と展開　外国語活動編』．東京：教育出版株式会社．

Keller, J. M.(1992). Enhancing the motivation to learn: Origins and applications of ARCS model. 『東北学院大学教育研究所紀要』．11，45-67．

ベネッセ．（2015）．「小学生の英語学習に関する調査」．
http://benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4760．2016年８月17日検索．

松崎邦守・北條礼子．（2006）．「中学校選択英語科ｅメールライティング学習における教授ツール・ポートフォリオの効果の検討」．『日本教育メディア学会年次大会発表論文集』．13，62-65．

文部科学省．（2004）．「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会外国語専門部会（第４回）議事録・配布資料」．
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/04070501.htm　2010年７月５日検索．

文部科学省．（2014）．「小学校外国語活動実施状況調査」．
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1362148.htm. 2016年８月17日検索．

文部科学省．（2015）．デジタル教材『Hi, friends! Plus』．

文部科学省．（2016a）．「小学校の新たな外国語教育における補助教材（Hi, friends! Plus）の作成について（第５・６学年用）」．http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1355637.htm. 2016年５月24日検索．

文部科学省．（2016b）．「平成27年度「英語教育強化地域拠点事業」事業経過報告書」．
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1368961.htm. 2016年８月17日検索．